

熊本大学薬学部を見学して

天方 奉子

2021年11月21日(日)

コロナ禍のため、海外への漢方生薬ツアーは今回も見送られ、昨年につき熊本大学薬学部を見学させて頂きました。副学長であられる甲斐広文教授と、デブコタ・ハリ先生にはご多忙の中、私達のために時間を割いて案内頂きました。この場を借りて感謝申し上げたいと思います。

宮本記念館(熊薬ミュージアム)

日頃から研修会等で利用させて頂いている宮本記念館ですが、昭和8年に熊本大学薬学部(熊薬)の前身である熊本薬学専門学校をご卒業された宮本佳博氏の寄付により建設されたそうです。玄関を入ったらホール正面にある陶壁「薬草の森」。これは宇土市にある蒼土窯で作られた草木捺彩陶という焼き物で、薬草園に生息する植物を描写しているそうです。凹凸、色合いに特徴のある見事な陶壁です。熊薬100周年記念ホール史料室(熊薬ミュージアム)館内には歴史的に貴重な展示物が多数ありました。戦火を逃れ今に残る「宣戦詔書」「憲法発布勅語」は、ホームページにも公開されておらず、普段は桐箱に保管されているとのことですが、今回、閲覧の機会を頂きました。また、資料の中で個人的に印象深かったのは、「有機概略図」です。有機化合物の性状を有機軸と無機軸の座標上に位置させたグラフで、熊本大学薬学部の藤田穆教授により確立され、昭和5年発行の「有機分析」(カニヤ書店)にまとめられているそうです。現在でも医薬品、化粧品を始め広範な分野において、化合物の構造から物性を知るために利用されていると伺いました。

薬草パーク

キャンパスの奥にある薬草園は緑豊かで、生憎の曇り空であったにも関わらず、空気がとても澄んでいるように感じました。一年草は植え替えの時期にあたり、一年の中では花が最も少ない季節とのことでしたが、ヒマラヤ桜は満開でした。少しだけ残っていたサフランの花、と思いきやイヌサフランの花。アヤメ科のサフランと名前も花の形も似ていますが、全く異なるイヌサフラン科の植物で、痛風等の治療に用いる「コルヒチン」を含んでおり、少し食べただけでも下痢や嘔吐、皮膚の知覚減退、呼吸困難などの症状を引き起こしてしまいます。サフランと間違えたら大変です。また、ビールづくりに用いられるホップの雌しべ「毬花」とカリンの果実を頂いて帰りました。鑑賞後は食用として無駄なく頂きました。

薬草ミュージアム

薬草ミュージアム伝統資料室には、私達が普段用いている漢方薬を構成している生薬の他、世界の伝統・伝承医学で用いられる植物の標本類が展示されています。また、日本にも民間

薬があるように諸外国にも様々な民間薬があり、ここではチベットやアフリカ諸国で用いられている薬草等も展示されています。しかし、これら伝承されている民間療法は古くから経験に基づいて行われているものであるが、エビデンスが不明であることが一方で問題でもあるとのこと。そこで、適正な民間療法を構築する一助を担うべく、エビデンスの確認等を現地の大学と共同で行っているそうです。また、資料室の壁に掛けられたチベットの曼荼羅には薬草が描かれており、印象強く目を引きました。

フェルメールの美術品

「アートとサイエンスが共存する空間を」という熊本大学薬学部のキャンパス構想についてはご存じの方も多いと思います。展示してあるヨハネス・フェルメールのリ・クリエイト作品について、当日は甲斐先生から直々に解説を頂き、表現の中に光をうまく取り入れたアートを科学的思考で鑑賞することができました。まさに、「アートとサイエンスの共存する空間」であり、研究の場として素晴らしい環境であると感じました。

見学終了後は、熊本ホテルキャッスルの桃花源で中華料理を頂きながら、甲斐先生、ハリ先生も交えて歓談しました。研究の場、学びの場である大学の先生方と、薬局で薬剤師として働く私達が交流する機会を頂くことは非常に貴重であり、大変有意義な時間でした。また、薬局薬剤師は「街の科学者」であることを改めて意識した一日でした。